



## 東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館

本年度、当館は1976年の開館から40年目を迎えました。フランス近代美術を中心とする春・秋の企画展をはじめ、ファミリーに楽しんでいただく夏、公募展FACEで始まる新春。季節を通じて幅広い層の皆様にご来館いただきました。

## フランスの風景 樹をめぐる物語 —コローからモネ、ピサロ、マティスまで—

聖書に登場するエデンの園の「生命の樹」や「知恵の樹」、イエス・キリストの系図を示した「エツサイの木」、北欧神話に登場する世界を結び付ける空想の巨大樹「ユグドラシル」など、古くから樹木は人類にとって最も身近に存在する自然界の要素であり、同時に、人間の生と死を表す神秘的な存在であったといえます。芸術の世界でも、樹木は場面が戸外であることを示すものとして、あるいは何かを象徴するものとして、古今東西、様々な形で描かれてきました。「フランスの風景 樹をめぐる物語」では、「樹木」というモチーフを通じて、19世紀初頭から20世紀初頭まで、フランスにおける近代風景画の変遷をたどった展覧会です。

ラルヒーの上位を占めていた「歴史画」の背景として描かれていた自然や樹木が、絵画の主題として前景に描かれるようになったのは比較的新しく、19世紀に入ってからのことです。とはいえ、絵画の独立した主題として樹木を描いたロマン派やバルビゾン派、樹木を介して自然の光と影を追求した印象派や新印象派、樹木の色や形を絵画の自律した要素としてとらえようとしたポスト印象派やフォーヴィスムの画家たちの作品に見られるように、樹木は絵画の新しい流れを作り出そうとした芸術家にとって格好のモチーフであったといえます。そして描かれた樹木は、フランス近代風景画の歴史と密接な関係を持ち、絵画の近代化に重要な役割を果たしていたといえるのではないでしょうか。



ジャール=フランソワ・ドービニー 《ヴァルモンドワの下草》  
1872年 油彩・キャンヴァス カミーユ・ピサロ美術館、ポントワーズ  
Pontoise, Musée Camille Pissarro  
Photographie: Musée Camille Pissarro, Pontoise



クロード・モネ 《ヴェトウイユの河岸からの眺め、ラヴァクール(夕暮れの効果)》  
1880年頃 油彩・キャンヴァス 個人蔵  
Collection privée  
Photographie: Musée Camille Pissarro, Pontoise

フランスのバリ近郊、ポントワーズにあるカミーユ・ピサロ美術館館長、クリストフ・デュヴィヴィエ氏の監修のもと、フランスを中心に国内外の美術館および個人所蔵作品から、油彩、デッサン、版画など、19世紀初頭のロマン派やバルビゾン派に始まり、20世紀のフォーヴまで、樹木に対する画家たちの想いが込められた作品113点を一堂に展示、近代フランス風景画の変遷と展開をたどりました。

本展覧会ではフランスのバリ近郊、ポントワーズにあるカミーユ・ピサロ美術館館長、クリストフ・デュヴィヴィエ氏の監修のもと、フランスを中心に国内外の

【展覧会データ】  
展覧会名 | フランスの風景 樹をめぐる物語  
会 期 | 2016年4月16日(土)～6月26日(日)  
主 催 | 東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館 日本経済新聞社  
協 賛 | 損保ジャパン日本興亜  
後 援 | 在日フランス大使館 / アンスティチュ・フランスセ日本  
協 力 | エールフランス航空 / KLMオランダ航空 日本航空  
企画協力 | アートインプレッション

## クインテットⅢ—五つ星の作家たち

本トモコ、堀由樹子、横溝美由紀の近作・新作63点を展示し、現代絵画の在り処を検証します。

5人の作家たちは、都会に生まれ育ち暮らしながら憧憬の念と共に「自然」を見つめ、取り囲む環境を手掛かりに制作しています。それらは写実的な作品というよりも、日常接する「自然」に自らの記憶や思考を重ね、豊かな感性と個性で形象化された作品です。

川城はカドミウムレッドパープルを中心とした油絵具に蜜蝋を混ぜた独特の絵画を制作しています。全面赤色の画面を見つめることで植物的な柄が浮かび上がってきます。木村はパネルに張った和紙に鉛筆とアクリル着彩で花を大きく捉え、そこに「生命」の象徴や、「時空」の広がり、「宇宙」への

回帰などのテーマを表象しています。橋本は椿、りんご、白粉花など「ありふれた」モチーフを、丁寧に油絵具を重ねて「叩き筆」で叩いて筆触が残らないようにして描いています。「深みある艶」と「堅牢な絵肌」が特徴的です。堀は日常ふと目を奪われ立ち止まる風景を描いています。構想スケッチをもとに描き続けることで画面は変幻していき、最終的に独自の世界を構築しています。

これらの絵画の前に佇むことで、私たちの心に奏でられる五重奏は、爽やかな「残響」として、しばらく留まることでしょう。

【展覧会データ】  
展覧会名 | クインテットⅢ—五つ星の作家たち  
会 期 | 2017年1月14日(土)～2月19日(日)  
主 催 | 東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館 朝日新聞社  
協 賛 | 損保ジャパン日本興亜、SHISEIDO



堀由樹子 《森の午後》  
2016年 油彩・キャンヴァス、116.7×91cm

「クインテット」(五重奏)と題し、約20年間の継続的な作品発表実績があり、将来有望な作家たちを紹介するシリーズ企画第3弾。同世代の川城夏未、木村佳代子、橋

## FACE2017 損保ジャパン日本興亜美術賞 グランプリ 青木恵美子 Emiko Aoki 《INFINITY Red》



1976年生まれ 埼玉県在住  
2009年 シェル美術賞展 入選(2010年本江邦夫審査員賞)  
2010年 多摩美術大学大学院修了  
トーキョーワンダーウォール公募2010 入選  
2012年 あいちアートプログラム アーツチャレンジ2012  
第27回ホルベイン・スカラシップ奨学生  
2017年 VOCA展2017 佳作賞、大原美術館賞



《INFINITY Red》2016年 アクリル・キャンヴァス、130.3×162cm

5回目となるFACE2017は、前年比5.5%増の出品者を迎え、魅力的な作品が数多く出品されました。4次に及ぶ入選審査では、作者名、年齢、性別、所属などの個人情報伏せた作品本位の審査が行われました。作品を何度も見ることで作品の特徴や個性が際立ち、全902点の中から入選作品71点を決定しました。入選者は男性35名、女性36名、平均年齢は38.8歳でした。

見事グランプリを受賞した青木恵美子は、生命の象徴を表現した抽象絵画や

アクリル版の《PRESENCE》シリーズの作品で知られています。今回のアクリル絵具を盛り上げた花卉状レリーフの作品《INFINITY Red》は、青木のこれまでの作品から大きな変化が見られ、審査後に作者名を公表すると審査会場で驚きの声があがりました。

赤やオレンジなどの同系色のアクリル絵具で数種類の花弁を形成して画面に貼り付けたこの受賞作は、遠くからみると抽象的にも見える個性溢れる作品として高く

評価されました。

【展覧会データ】  
展覧会名 | FACE展2017 損保ジャパン日本興亜美術賞展  
会 期 | 2017年2月25日(土)～3月30日(木)  
主 催 | 東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館 読売新聞社  
協 賛 | 損保ジャパン日本興亜



## 魔法の美術館 光と影のイリュージョン

「魔法の美術館 光と影のイリュージョン」は、「見て」「参加して」「楽しむ」新しいタイプの展覧会です。2014年夏に当館で開催した「不思議な動き キネティック・アート展 ～動く・光る・目の錯覚～」に続く、テクノロジーアートの発展系の展覧会ともいえます。その具体的な内容は、鑑賞者の動きに合わせて、色とりどりの光や影のモチーフ、



藤本直明《Immersive Shadow》©naoaki FUJIMOTO

映像、音が変化する作品などにより、美しくも不思議な空間が生み出されていくというものです。

本展を構成した作品は、メディアアートと呼ばれてきたジャンルが近年進化した体感型のアートが中心です。メディアアートとは、コンピュータなどを媒体とし、先端技術を駆

使して表現されるアートを指します。1950年代から世界的に隆盛した機械仕掛けのキネティックアート(動く芸術)のように、第二次大戦後の科学技術の発展を背景としたテクノロジーアートは、アナログ・テクノロジーを応用していました。これに対して、メディアアートは、1980年代以降のデジタル・テクノロジーを核として展開する現代の新しい芸術表現といえます。近年ではさらに進化し、ジャンルにとらわれることなく全く新しいアートとして発展しています。なかでも本展を特徴づける、鑑賞者と互いに反応し合う性質をもつ作品は、インタラクティブアートと呼ばれます。鑑賞者が参加することで作品は成立し、鑑賞者自身もまたアートの一部になるのです。

子どもから大人まで世代を超えて楽しめる「魔法の美術館」は、これまで全国の数々の美術館を巡回してきました。国内外で活躍する注目のアーティストたちが、さまざまな素材やコンピュータを使って仕掛ける“光と影のイリュージョン”。本展では、デジタル技術だけでなく、アナログ的な手法による作品を含む、アーティスト10組の感性あふれる作品17点を展示しました。

夏休みの時期でもある当館の会期中、若者や親子連れを中心にたくさんの方が



小松宏誠《Lifelog\_シヤンデリア》©kosei KOMATSU

来館し、光と影が織りなす魔法の世界を堪能しました。本展で初めて当館を訪れた方の割合は高く、「アートや美術館に親しむきっかけにもなる」等のご意見を多数いただき、好評のうちに幕を閉じました。

【参加アーティスト】(50音順)

岡田憲一+冷水久仁江(LENS)、緒方壽人(takram design engineering)、小松宏誠、重田佑介、坪倉輝明、藤本直明、松村誠一郎、的場やすし/山野真吾/徳井太郎、宮本昌典/小岩原直志、森脇裕之

【展覧会データ】

展覧会名 | 魔法の美術館 光と影のイリュージョン  
会 期 | 2016年7月12日(火)～8月28日(日)  
主 催 | 東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館 産経新聞社  
協 賛 | 損保ジャパン日本興亜  
企画協力 | ステップ・イースト

## 没後110年 カリエール展

生前は一定の評価を得ていたにも関わらず、その様式があまりにも独特であるがゆえに、「イズム」を主体とする美術史の欄外に追いやられてしまった画家は多いのではないのでしょうか。19世紀後半、セピア色の画面に神秘的に浮かび上がる人物像を描いたフランスの画家ウジェーヌ・カリエール(1849年生～1906年没)も、こうした画家たちのひとりといえます。

カリエールは、パリのエコール・デ・ポザールで学び、1876年にサロン初出品、1885年

には初の国家買い上げを果たすなど、着実に画家としての道を歩んでいました。その一方で、伝統的なサロンでの活動に甘んじることなく、サロンの分離組織であるサロン・ナショナルや20世紀前衛芸術の原動力となったサロン・ドートヌスの設立に関わるなど、新しい芸術運動にも積極的に関わりました。様式としては、印象派や新印象派の画家たちが明るく鮮やかな色彩を追い求めた時代に、一貫して茶褐色を基調にしたモノクロームで、妻や子どもたちをはじめ、身近な人物の肖像を中心に描きました。



ウジェーヌ・カリエール《手紙》  
1887年頃 油彩・キャンヴァス 個人蔵

## 風景との対話 コレクションが誘う場所

本展は、当館の収蔵品から「風景」を切り口にして51作家の作品81点を選び、内容と制作姿勢によってゆるやかに結びつく8つのグループに分けて紹介しました。大きなテーマを選んだのは、鑑賞する機会の少ない作品をより多く紹介するためです。多彩な世界を画家達と対話するように散策していただきたいという思いが展覧会名にはこめられています。

第1章「フランスのエスプリ」では、ユトリロのほか東郷青児が1960年代に二科展を通じて交流したパリの作家達12名の油絵とリトグラフをとりあげ、次章「東郷青児の旅」では東郷が旅行先で描いた風景画とスケッチの15点を展示しました。第3章「日本の風土」では岸田劉生や有島生馬から山口華楊と東山魁夷まで、西洋美術から「風

景画」の概念をとりいれつつ日本ならではの絵画を生み出した画家達を紹介し、一方の第4章「異国の魅力」には海外の街並みや風俗に惹かれた画家達を選びました。第5章「意識の底の地」には「心象風景」をキーワードにして無意識の欲望や不安を呼びさます非日常な光景を、第6章「日常の向こう側」にはありふれた事物を独自の画風で描くユニークな世界を、さらに第7章「世界の感触」には感覚に訴えかけてくる幻想性や表面の質感をもつ作品を集めました。最終章「思い出のニューヨーク」では、70歳をすぎて絵筆をとったグランマ・モーゼスが描くニューヨーク州の農場で四季折々に営まれた風物詩の15点を展示しました。

会期中、来場者から作家について情報をいただきました。この場を借りて謝意を表します。



福本章《ムラノの朝》1999年 油彩・キャンヴァス

【展覧会データ】

展覧会名 | 風景との対話 コレクションが誘う場所  
会 期 | 2016年11月26日(土)～12月25日(日)  
主 催 | 東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館  
協 賛 | 損保ジャパン日本興亜

## 鑑賞教育活動

新宿区教育委員会、公益財団法人新宿未来創造財団と当館の3者協働事業として新宿区立小中学校「図工・美術」の授業支援活動が9年目を迎えた今年度は小学校29校・中学校8校が参加。これまでの累計鑑賞会参加人数は小学生11,000名、中学生4,700名の合計15,700名となりました。

また、当館ではオリジナルイベントとして子どもから大人までを対象とした「対話による美術鑑賞会『ギャラリー★で★トーク・アート』」を展覧会ごとに1回ずつ休館日に開催しています。このイベントは今年で6年目を迎え、累計参加者が1,000名を越えました。今夏に開催した展覧会「魔法の美術館」では親子での参加申込みが予想をはるかに上回り、急遽開催回数を1回から3回へ増やしました。前述した小中学校への授業支援活動により、「作品から見たもの・感じたこと・思ったことを引き出す」経験を積んだボランティアガイドスタッフの声掛けにより、ゆったりとした雰囲気の中、参加者は同じグループ内での対話によりじっくりと作品と向き

合う時間を過ごしました。アンケートには「次回も是非参加したい!」の声を多数いただきました。「対話による美術鑑賞会」では、初めて美術館を訪れた方にも気軽に美術作品を楽しむ機会を提供し、記憶に残る体験をしてもらいたいと思います。また開館日の美術館では体験できない「展示室内での対話」の醍醐味を味わうとともに素直な気持ちで作品と向き合い他者の視点も受け入れる「自由な鑑賞」のあり方を理解してもらえたら嬉しく思います。



ウジェーヌ・カリエール《母性》  
1892年頃 油彩・キャンヴァス 個人蔵

本展覧会はカリエールのひ孫で、カタログ・レゾネの編集者でもあるヴェロニク・ボネ＝ミラン氏の全面的協力のもと、油彩を中心に88点(うち12点が新潟市美術館の所蔵作品、76点が個人所蔵作品)を展示しました。

【展覧会データ】

展覧会名 | 没後110年 カリエール展  
会 期 | 2016年9月10日(土)～11月20日(日)  
主 催 | 東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館 朝日新聞社  
協 賛 | 損保ジャパン日本興亜  
後 援 | 在日フランス大使館/アンスティチュフランセ日本  
協 力 | 日本航空  
企画協力 | IS ART INC.